



Title	大学における成人教育：ロンドンの場合
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 55, p. 111-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80871
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学における成人教育—ロンドンの場合

正 木 恒 夫

University Education for Adults in London: A Case Report

Tsuneo Masaki

University of London, with a century of tradition and experience, provides a valuable example of adult education at an advanced level. Out of a first-hand report of classes, meetings and people emerges a tripartite principle on which the great tradition has been built: localization, voluntariness and continuity of all its activities.

1

「ハムステッド・ウェイ 103 番地」のその家は、ハムステッド・ヒースの北西端に接する美しい住宅街の中にあった。ハムステッド・ヒースといえばロンドンの北部に広がる大緑地の一つで、よく手入れされた芝生とこんもり茂った森が、見はるかす限りに続く。その緑地に接する住宅街だけに、緑の多いロンドン郊外でもひとときわ緑が深い。白壁の大きな家だ。門柱の、番地を表示した横に、「ゴールドダース・グリーン労働者教育協会 (WEA)」の授業予告がタイプ印刷で小さく出ている。「ウィリアム・シェイクスピア『冬物語』。チューター J. D. ドッド博士。毎週月曜日午後 1 時 30 分より 3 時 30 分まで。」等々。古ぼけたドアのベルを押すと、小柄な中年の婦人が迎えてくれた。この家の主婦である。案内されて 12 畳ほどの客間に入る。壁際の書棚に日本の花嫁人形が（むきだしで）置いてあるのは、外交官である家の主の日本土産だそうだ。15 ばかり並んだいすの奥に先着の女性が 3、4 人、かたまって話をしている。仲間入りをして『冬物語』のことなどを話す。ロイヤル・シェイクスピア劇団による日本公演でこの作品を見たという、大いにうらやましがられた。そもそもストラットフォードなる所へ行っただけだということ。そうこうするうちに、いすが次々に埋まっていく。新年度の今日は第 1 回の会合なので、今年は〇〇さんはこないのかしらというような話になる。ロンドンでは珍しく、辞典通りのきれいな英語だ。実は〇〇さんは交通事故にあって入院中だということが分り、皆で見舞いの寄せ書きを始め

た所へ、ドクター・ドッドがふらりと姿を現わした。

ドクター・ドッドはその名からしても北部の出身らしく、色黒の小柄な人だ。鋭い目でにらみつけるようにしてしゃべる。その英語が又、音をあちこちで端折った北部なまりで、イギリス人にも分りにくいらしい。分らなかつたら言ってくれと断った上で、そんなことは忘れたように早口でまくしたてる。この日はすぐに授業には入らず、書記と図書係の選出から始まった。「このクラスはWEAの活動の一環で、従って参加者による自主運営が建前になっている」云々というドッド氏の説明を聞きながら、全員中流婦人のこのクラスとW (WORKER)の文字が結びつきにくい気がするが、現に前書記の大柄なM夫人は、WEAの熱心な活動家であるらしい。図書係はすぐに、前年通りこの家の主婦が引き受けることで落ち着いたが、書記の方は成り手がなくて難航する。この辺りは日本と同じだ。違うのは人品卑しからぬ老婦人が前書記を3人称で指して、「あの人は楽しんでやっているんじゃないの。もしそうだったら仕事を取りあげない方がいいわ。」と言ってのけたことだろう。当のM夫人も怒った様子はなく、「私は別にかまいませんよ。」と受けて立つ。しかしドッド氏は考える所があったのか、決定を次週に持ち越して授業に入った。

テキストはシェイクスピアの『冬物語』。ドッド氏はいきなり、第1二ツ折り本を1ページ分コピーしたのを配って、参加者の意表をつく。第1二ツ折り本といえば、シェイクスピアの死後7年目に出た最初の全集本で、綴字と句読法が現代版と違っているだけでなく、文字の用法も、少しだが、違う。皆少々面くらっているのを尻目に、ドッド氏は作品を通読しての感想を求めた。読んでくることになっていたらしい。「がっかりした」「面白くない」という声が多かった。ドッド氏はそれをにやりと受け流して、テキストの読みに入る。ドッド氏の読み方は独特の精読法で、1語1語なめるようにしながら、イメージとスタイルの累積効果をとらえようとする。意味の多層性の発見ということが大切な仕事になってくるから、全体として、知的ゲームの性格をおびてくる。参加者は全員、そのゲームを楽しんでいるようだ。指名されなくてもどんどん発言する。先生の発言にも平気でわりこんでいく。要所要所でドッド氏が問題を提起して方向づけをするが、その際解説や注釈の權威を借りることは一切しないから、全ての発言がその論理性によってのみ説得力をもつ、真に開かれた討論が成立する。と同時にドッド氏は、*OED* (オックスフォード大辞典) とコンコードダンス (シェイクスピア用語辞典) の重要性を常に強調することによって、解釈が恣意的になるのを防いでいる。つまりドッド氏の方法は、注釈に手を引かれて名所案内よろしく作品を通りぬけるのではなく、*OED* とコンコードダンスを武器に、自分なりの読みを作っていくことであるらしい。ティー・ブレイクをはさんでの2時間、沈黙による空白がないから、文字通り充実した、快い緊張にみちた2時間だった。最後に参加者の1人から、BBCの第4放送に「演劇の現場で」という番組があり、今そこで「シェイクスピアの舞台」というのをやっていて面白いという紹介がある。ドッド氏はぴたりと定刻にテキストを閉じると、あっというまに姿を消してしまった。

雨あがりの秋の郊外で、ロンドン大学学外ゼミとの、これが最初の出会いだった。

Extra-mural courses——直訳すれば「壁の外の授業」, 'Extra-mural' というのは元来都市の壁つまり境界の外側を意味する言葉だが, 19世紀の末から大学の壁の外での, 市民のために開放された授業を意味する形容詞として, 用いられるようになった. 今日ロンドン大学では約1000の学外講座が毎年開かれており, およそ2万人の人々がそれに参加している. 講座は大別して2つの種類に分れる. 大学開放講座 (university extension courses) と学外ゼミナール (university tutorial classes) である. 開放講座では3年ないし4年 (まれには2年) のカリキュラムを終了すれば, 特定科目の修了証書を取得できる. 学外ゼミは1年単位だが, 同一テーマで3年間継続するものもある. 開放講座で証書を取得しようと思えば, 年度末の試験に合格しなければならない. 学外ゼミでは証書を交付せず, 従って試験もない. 運営主体も前者が各地の教育委員会等の公共団体, 後者が労働者教育協会 (WEA) という違いがある. 要するに開放講座が, 大学教育の学外版という性格が強いのにに対して, 学外ゼミは, 形式的により自由で, むしろ自主講座に近い, とみてよかろう. 私が先に紹介したのは, この学外ゼミのあるクラスにおける初日の授業風景なのである.

Extra-mural studies——壁の外での学習. この奇妙な表現が私にとって親しいものになったのは, 3人の著名なイギリスの学者を通じてだった. 経済学の R. H. トーニー (Tawney, 1880-1962). 文学のレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-) とリチャード・ホガート (Richard Hoggart, 1918-). トーニーは, 名著『宗教と資本主義の興隆』によって, 日本でも広く知られている. ウィリアムズは独自のマルクス主義文学理論で, 又ホガートは労働者文化の研究によって, イギリス国内はもとより, 国際的にも高い評価を受けてきた. 私はこれらの人々から長年にわたって, 学問上の恩恵をこうむっている. しかし例えばトーニーが, 16年もの間 WEA の会長をつとめたことを知ったのは, 比較的最近のことである. 大学紛争の渦中であって, 外大二部のあり方を模索していた時, 私はトーニーの『急進主義の伝統』に収められた2つの美しい文章 (『民主教育の実験』・『WEA と成人教育』) に出会って, 深い感動を受けた. トーニーは, WEA に集う男女を「生徒というより使徒のようだ」と言い, 「物質的な成功ではなく精神の充足」を求めて学ぶ人々について, 敬愛をこめて語る. それが私には, 教育と学習の理想の姿のように思われたのである. 一方ウィリアムズは, ある鉱山労働者が成人教育に参加することで, 自己表現を獲得していく過程を, 感動的に描く (『教える者と教えられる者——壁の両側で』『民主主義のための教育』). 又ホガートは, 成人学生 of 長所と短所を見きわめた上で, 成人のための文学教育について周到かつ具体的な提言を行なっている (『学外教育における英文学』『人から人へ』第2巻). 私はこれらの文章を, 二部教師としての体験と重ねあわせながら, むさばるように読んだ.

そこに感傷がなかったといえは, 嘘になるだろう. 外大二部生の多くは, 成人でもなければ労働者でもなかった. それに, 「学生はあらゆる職業を網羅しているが, 中でも筋肉労働者は過半

数を占めている」という、トーニーの1914年における発言（「民主教育の実験」）そのものが、楽観的にすぎるものであり、そこに感傷的な誇張がなかったとはいえない。がそれはともかく、労働者の自己教育運動が、大学の良心的部分と出会って生まれたイギリスの成人教育は、1つの理想像を示していた。それだけではない。トーニーや、ウィリアムズや、ホガートという、それぞれの分野で重要な位置を占める3人の学者が、労働者の教育運動とかかわりながら、独自の学問的立場を形成してきた、そのことが、私には重要だった。トーニーは、ロンドン大学に迎えられ以前に、十数年にわたって、北イングランドでWEAの講師をつとめている。ウィリアムズはオックスフォードで15年、ホガートはハルで13年、それぞれの大学における、学外講座のチューターであった。（このリストには、後でふれるように、労働運動史の大家 G.D.H. コールを加えることができる。）

これらの人々は、アカデミズムの中心部ではなく、むしろその周縁で、学問的成長をとげた。労働者や一般市民の生活知との出会いから、問題意識と方法をきたえあげていった。その体験をぬきにして、例えば、ウィリアムズの『都市と田園』のような書物が書かれることは、なかったに違いない。ウィリアムズはこの書物の中で、「労働」の観点から、従来の英文学通史を見事に裏返してみせた。その方法は、鉄道労働者の息子であるという彼の出身階級だけで、説明のつくものではあるまい。

このように私の成人教育に対する関心は、私が尊敬する学者たちの業績と、密接に結びついてきた。私はいちど自分の目で、イギリスにおける成人教育の実態を確かめてみたいと思った。その希望は1980年度短期在外研究という形で、突然実現することになった。私は同僚諸氏の協力を得て、受け入れ先をロンドン大学学外教育部 (Department of Extra-Mural Studies) にきめた。最終的に私を受け入れてくれたのは、学外教育部副部長で、学外ゼミを総括する立場にある、T.F. エヴァンズ (Evans) 氏であった。

3

私は着英早々エヴァンズ氏を、ラッセル・スクウェアの樹木を見下ろす、3階の副部長室に訪ねた。初老の有能な行政官という感じだが、実はバーナード・ショーの研究で知られ、最近大部の批評集を編さんしたほどの人だ。愛想よく迎えてくれ、日本でのサマー・スクールを企画したのだが、文化振興会（ブリティッシュ・カウンシル）の援助が受けられなくてだめになったと残念がる。私の行動日程について相談の結果、9月20日に新任講師のためのオリエンテーションがあるから、とりあえずそれに出てはどうかということになった。それまでにこれを読んでおくようにといて、1つの小冊子を渡された。専任講師の1人、ジョン・バロウズ氏の手になる学外教育部100年史、『ロンドンにおける成人のための大学教育——100年の成果』（1976）である。バロウズ氏は名簿をみると、社会学担当の上級講師とある。100年にわたって蓄積されたぼう大な資料を、120ページの小冊子にまとめあげた手腕は相当なものだと思う。しかも人物間の交流を

生き生きと描いて、飽きさせない。この100年史の登場人物は、文学ではディケンズ、ハーディー、ハドソン、フォースター、T. S. エリオット、音楽ではヴォーン・ウィリアムズ、社会科学ではトニー、コール、ラスキなど、多彩をきわめる。それらの人々が、あるいは学生として、あるいは講師として、学外教育部100年の歴史にかかわっていくさまは、壮観というほかないが、今はむしろ、豊富なエピソードの中から、発展の節目を抽出することによって、ロンドン大学における成人教育の性格を考えてみようと思う。

学外教育部の歴史は1876年に始まる。これに先立つ1873年に、ケンブリッジ大学が既に、社会人のための講座を開設していた。ロンドンでも、1823年に創立されたパークベック会館（現在のパークベック・コレッジ）が成人教育を行っており、大学内部ではキングズ・コレッジが、1855年に「ガス灯の大学」(ディケンズ) すなわち夜間部を発足させている。しかしこれだけでは、ロンドンのような大都市で、年々増大する成人の教育要求に応ずることは、到底不可能であった。そこでこの問題を討議するため、1875年5月、王立協会において、「貴顕紳士」の集会が開かれることになる。ここで選出された実行委員会が、翌6月、ロンドン市長公邸で、市長主宰の下に、第1回の会合を開く。委員会の当面の仕事は、「大学教育普及ロンドン協会 (the London Society for the Extension of University Teaching, LSEUT)」の設立と法人化であったが、これは1876年1月に実現をみた。以後およそ4分の1世紀にわたって、この通称「ロンドン協会」が、大学レベルにおける成人教育の主な担い手となる。

ロンドン協会の提唱者は、G. J. ゴーシェン (Goschen, 1831-1901) であった。ゴーシェンはイングランド銀行総裁をへて下院議員となり、大蔵大臣をはじめ、さまざまな要職を歴任した人である。このことと、協会の設立が「貴顕紳士」の集まりで提案され、市長の司会する実行委員会決定された事実をあわせて考えると、運動の当初の性格が明らかになる。それは決して知識から疎外された人々の、下からもりあがる運動ではなかった。それはむしろ上からの、一種の慈善運動——バロウズ氏の言葉を借りれば、「ヴィクトリア朝的博愛主義のもう1つの吐け口」だったのである。財政難に悩む協会をしばしば救ったのは、各種の慈善団体、なかんずくギルクリスト財団だった。しかしこの、上からの教育運動は、期せずして、下からの運動の核を胎内で育てつつあった。労働者教育協会 (WEA) の創始者、アルバート・マンズブリッジ (Mansbridge, 1876-1952) がそれである。マンズブリッジは、トマス・ハーディーと共に、かつて「ガス灯の大学」キングズ・コレッジの夜学生であり、後にロンドン協会が主催する大学講座の熱心な聴講者となった。1903年、27才の若さで WEA を設立すると、独自の教育運動を展開するかたわら、ロンドン大学に働きかけて学外ゼミを発足させ、それを WEA の支部活動とつなぐことによって、大学教育の大衆化に大きな役割をはたすことになる。

1876年秋、5会場、7講座、139名の受講者で発足したロンドン協会の大学講座は、四半世紀のうちにめざましい発展をとげ、1901年には59会場、103講座、受講者は実に15,407名を数えるに至った。拡大の方法は、各地の会場を「センター」と名づけて活動の拠点とし、それを都心部

から郊外に向かって拡げていくやり方であった。講座の対象には当初、有閑階級、男女事務労働者、および熟練労働者という3つのグループが想定されたが、実際には、イースト・エンドの労働者街をのぞいて、小学校教師を含む中産階級が、受講者の大半をしめることになった。こうした特徴といい、授業の形態（週1回、1時間の講義の後学習指導、レポートの提出）といい、今世紀の初めには既に、今日の学外講座の原形というより形そのものが、できあがっていたといえる。

バロウズ氏の100年史を読むと、ロンドン協会のめざましい成功にもかかわらず、大学はこれに対してむしろ冷淡であったという印象を受ける。その理由は、例えば某化学教授の次のような発言の中に、端的に示されている——「協会の大学講座は意義深いものだが、大学の講座といえるものではない。」(1893年、大学改革のためのクーパー委員会における証言。)協会内部には当初から、その活動を大学に吸収させ、受講者に学位取得への道を開きたいという考え方があった。だが再三の訴えも、大学側から好意的な回答をひきだすことはできなかった。1898年、ロンドン大学法 (the University of London Act) の成立をみてはじめて、大学は重い腰をあげるが、出てきた答は、協会が期待したように、学外講座のために独立した部を設けるというのではなく、「協会の事業をひきつぎ発展させるための施策について、大学本部に提言を行うことを目的とする常任委員会」を発足させるというにとどまるものだった。だがいかにそれが不十分な答であったとしても、とにかく協会の発展的解消と、事業の大学へのひきつぎがきまったのである。協会は1902年10月1日をもって解散し、その業務は1900年に発足した「大学教育普及推進委員会 (the Board to Promote the Extension of University Teaching, BPEUT)」にひきつがれることになる。

ロンドン大学学外教育部の歴史は、ここで第2期に入る。BPEUTは数度の改組改称の後、第2次大戦後は「学外教育評議会 (the Council for Extra-Mural Studies)」として今日に至っている。たとえ改組や改称があっても、委員会を主体とし、これに事務局が付属するという機構そのものには変化がない。従って学外教育部はコレッジのように、独立した自治体ではなく、大学本部 (Senate) に直属する1部門なのである。いずれにせよ、成人教育運動は、大学に吸収されることによって、相対的に安定した財政基盤を獲得したということができる。そしてこの基盤の上に、学外講座は質量共に、いっそうの発展をとげることになる。量的発展を講座数によってみると、第1次大戦直前の1914年に135講座、第2次大戦直前の1938年に193講座、第2次大戦後の復興期を終った1950年には496講座が開かれており、着実な伸びを示しているが、特に第2次大戦後の成長が著しい。これは戦後急速に高まった国民の教育要求と、それに対応する政府の文教政策を反映するもので、この時期を発展の第3期とみなすこともできよう。

こうした量的発展と共に、大学移管後の成人教育は、いくつかの点で、重要な質的变化をとげた。第1は、若干の科目について、準学士号 (diploma) と修了証書 (certificate) の授与が可能になったことである。これらの資格は、社会的に一定の評価を受ける場合がある (例えばケース・ワーカー) だけでなく、大学進学を希望する際、成人のための特別入学資格の一部として認めら

れることがあるので（例えばロンドン大学のパークベック・コレッジ）、それなりの価値を持つのである。

第2の重要な変化は、WEAの結成と、その要求に基づく学外ゼミの発足である。マンズブリッジは1903年にWEAを創立すると、独自の講座を開設する一方、大学に書簡を送り、WEA及び大学側委員会(BPEUT)双方の代表から成る合同委員会の設置を提案した。この提案は大学側の受け入れる所となり、1909年に成立した合同委員会の初仕事は、5つのセンターにおける学外ゼミの開設であった。学外ゼミは、‘tutorial’の名が示す通り、チューターの指導の下に、参加者が自主的な学習と討論を行う小規模の自主ゼミであり、それが労働者・市民による自己教育運動に最もふさわしい授業形態として選ばれたのは、むしろ当然であろう。以後学外ゼミは、WEAの支部活動と結びつくことによって、いわば運動の主流としての地位を、急速に確立していくことになる。

第3の変化は、機構の整備である。ロンドン大学の成人教育は、常勤の事務長(registrar)ただ1人という、貧弱なスタッフで出発し、長らく講座の全てを非常勤講師に依存しなければならなかった。それが1922年にはじめて、専任講師の採用にふみきることになる。初代の専任講師は、後の労働運動史の大家、G. D. H. コール(Cole, 1889-1959)であった。コールは成人教育の組織と運営について、数々の提案を行なったばかりでなく、受持のゼミでも独創的な授業方法によって、めざましい成果をあげている。その水準の高さは、労働運動史に関する学生のレポートのいくつかが、そのまま彼の著書の1つに収められている事実をみても分かる。コールは学外講座の中に、大学のアカデミックな雰囲気が持ち込まれすぎていることを嘆き、受講者自身の中から将来の教師を育てて行く必要を痛感していたという。学外ゼミの成長に、コールがはたした役割は大きい。

機構の整備はその後も徐々に進み、1927年には初代学術部長(Director of Studies)として、経済学者のバーバラ・ウトン(Barbara Wootton, 1897-) 女史が迎えられ、さらに1937年には地区在住オルグ兼チューター(resident organizing tutor)の制度が発足して、地域活動の定着と拡大がはかれる。しかし機構の拡充が一気に進み、学外教育部が名実共に「部(department)」としての体裁をそなえるようになったのは、第2次大戦以後のことらしい。1980年現在、学外教育部は部長と2人の副部長の下に、40名の職員からなる事務局と、21名の専任講師、6名の図書館司書をかかえる大所帯であり、約900の講座と2万名に近い受講者、それにおよそ17万冊という蔵書を有して、全国最大の規模を誇っている。

4

前節に要約した100年史からも既に明らかなように、ロンドン大学学外教育部の過去と未来は、決してばら色一色ではない。そこには我々にとっても重要な問題が、いくつか含まれている。

第1の問題は、成人教育の目的についてである。成人教育の目的は、成人の知識欲をみだし、

自己教育の方法を習得させることにあるというのが、学外教育部の基本的な発想である。従ってそれは、教養的であり、非職業的性格をもつ。(この点は、私が訪れたもう1つの成人教育機関、シティー・リット (City Lit) の副校長スプリングム氏も力説していた。)部分的にはカウンセリングや社会福祉など、職業的な科目について、準学士号の授与を行なっているものの、全体としては圧倒的に、教養的性格が強い。この点を従来の成人教育における欠陥として指摘する発想の中から、例の放送大学が誕生した(1971年)とすれば、それとのかねあいでの問題にどう対応するかが、今後の課題の1つとなる。

これからむもう1つの問題は、大学における学位取得の問題である。成人教育の目的が、純粋な知識欲の充足にあるとするなら、学位の取得といった世俗的な目標は、視野の外に置かざるをえない。事実、そうしたいわば無償の学習意欲について、感動をこめて語られるのを耳にしたことが幾度かあった。だがこの点については、100年史をみても、運動の内部で意見の対立があり、決着がついたとはいいいきれないことが分かる。現在の所、成人コースの修了が、大学入学資格の一部になり、又ロンドン大学の「学外学生 (external student)」制度によって、通学せずに学位を取得する道が開かれてはいる。しかし学外教育部が、学習の継続性と系統性を強調すればするほど、それは大学の学内教育そのものに近づく。そのことによって、成人コースの修了資格と大学の卒業資格との互換性が、改めて問題にならざるをえないのである。しかも一方では、学位取得を前提とする放送大学(正確には「公開大学 (the Open University)」)からの挑戦があり、また他方、元来勤労者のための夜間大学であったバークベック・コレッジが、一般学生をも受け入れる昼夜開講の大学に変身するきざしを見せはじめている。このように複雑化する状況の中で、最も幅広い受講者を擁する大学の成人教育を、高等教育全体の中でどう位置づけるかが、今後急速に回答をせまられる問題となるだろう。

第3の問題も又、上の2つの問題と密接に関連している。それは学外教育部専任講師の、大学における処遇の問題である。この問題は、バロウズ氏の100年史によると、既に1910年頃(従って講師がまだ全て非常勤であった頃)から提起されており、今なお未解決だという。学外講座側の要求は、学内授業の担当・共同研究室の利用・学術委員会への所属など、次第に具体的になっていくが、大学側は一貫してこれを無視してきたといつてよい。その理由は例えば、1944年に英語英文系学術委員会がいみじくも述べたように、「講師の一部に大学教員としての資格を欠く者がある。」というものだった。これはしかし、現任講師の学歴と学位を問題にする限り、単なる言いがかり以上のものではなく、それだけにかえて問題の根深さを感じさせる。私が滞英中しばしば耳にした表現の1つに、「成人教育は教育界のシンデレラだ」というのがある。それは成人教育の置かれたシンデレラ的情況だけでなく、成人教育にたずさわる人々の心情をも表わしたものであろう。成人教育の先進国イギリスにしてなお存在する、このような偏見と差別意識を前にして、私はいささか憂うつにならざるをえなかった。

これらの問題にもかかわらず、我々はロンドン大学における成人教育の歴史と現状から、多く

の教訓をひきだすことができる。その中で最も重要なのは、教育の形態と方法——具体的には、地域性・自主性・継続性の3つであろう。「地域性」とは、学外講座の発想そのものであり、大学が壁の外に出て、住民と、その居住地において接することを意味する。しかもこの「地域」は、我々が想像しうる以上に広い。今日ロンドン大学の「学外教育エリア」は、首都圏全域はもとより、隣接するエセックス、ハートフォードシャー両県の南部をも含む。この広大な「面」が、地区センターとWEA支部の、あわせて144にも及ぶ「点」によって、網の目のようにおおわれているのである。この徹底した地域性こそ、学外講座のめざましい成長を可能にした最大の要因であろう。住民が都心部の大学に出向いてくるのを待つという発想が、「役所」的発想であるとするなら、逆に大学が住民の中に入っていくという発想は、「運動」的発想であるといえる。従って「地域性」は、当然「自主性」とも結びつくのである。

ロンドン大学の学外講座は、受講者による自主的運営を前提としている。それが最も典型的にみられる学外ゼミについて、その実態をみると、まず毎学年当初、クラス毎に書記と図書係が選ばれる。図書係は、学外教育部図書館から、「ブック・ボックス」と称する大きなトランクに入れて届けられる、その年度の参考図書を管理し、貸出し業務にあたる。テキストなどを急にそろえる必要が生じたりすると、周辺の公共図書館に頼んで、必要部数を集めてもらうといったこともする。書記は会計をも兼ねていて、年額6000円前後（1980年現在）の受講料を集めてWEAに納入する。（学外講座にかかわる人件費は、全額国庫によってまかなわれており、受講料は会場費と活動費にあてられている。）だが書記の重要な任務は、何ととっても、受講者の確保であろう。学外ゼミは全て、クラスの性格に応じて、成立に必要な最低人員をきめられている。例えば14名以下だと、どのクラスも不成立となり、逆に18名以上だと3年連続の特別ゼミに昇格できる。実際スタートしたものの、人数不足でとりやめになるクラスもあるらしく、学外教育部の事務室にいと、それをめぐる電話でのやりとりをよく耳にする。従って毎学年始めには、書記を中心に人集めの努力がくり返される。つまり受講者は、ここではお客ではなく、運動の意識的な参加者なのである。

あらゆる運動がそうであるように、成人教育運動も又、核になる活動家集団がなければ育たない。活動家を育てるのは、時間と経験である。ゼミの受講者が、毎年そっくり入れかわっていたのでは、活動家は育たない。つまり学外講座における「自主性」は、「継続性」と固く結びついているのである。私が参加したどのクラスにおいても、メンバーの大半は継続受講者であった。これは一面では、講座の既設地区における、受講者数の頭打ちを意味するだろう。しかし他面そのことが、組織活動と学習内容における、驚くべき質の高さを保証していることも事実であろう。私は全部で4つのクラスに参加することができたが、どのクラスでも初回のティー・ブレイクには、誰彼となく私に近寄ってきて、学外講座のすばらしさについて語ってくれた。WEAの歴史についてとうとうと語りはじめた人もあった。第1節にも紹介したハムステッド・ウェイのクラスでは、前書記のM夫人がひとかどのシェイクスピア通を自任していて、行く度にあれこれの研

究書を紙きれに書きつけては、私に渡してよこした。ロンドン大学の成人教育は、このように、学習と運営の両面にわたって、参加者の自覚的な努力によって支えられている。つまりそれは、運動なのである。大学と受講者との関係は、供給者と消費者のそれではなく、共通の目的によって結ばれた、同志としての関係に他ならない。これはイギリスにおける成人教育の、大きな特徴であろう。このすぐれた特徴を生み出したのが、「地域性・自主性・継続性」という3つの原則だったのである。

5

1980年9月28日、日曜日、午後3時。ナショナルギャラリーを背にしたトラファルガー広場の、ネルソン像の下に——というより像の台座そのものの上に、いすと机が並べられ、15人ほどの人がすわっている。像をとりまいて思い思いに、立ったりうずくまったりしている人の数が、およそ500。放送大学学生自治会主催の、「成人教育を守る国民集会 (Rally for Adult Education)」である。56メートルの高さからネルソンが見下ろす、丁度その辺りに置かれた聖火台に、遠くウェールズから運ばれた「知識の炎」が、最終ランナーによって点火されると、主催者が議長を紹介して集会が始まった。発言者は、労働者の「大学」ラスキン・コレッジの元学長、WEA 書記、自由党文教部長、労働党国会議員で元文部次官、放送大学教授および同学生。皆メモを見ながらの発言だが、雄弁で、理路整然としている。高い失業率の下での財政難で、成人教育のための予算が、集中攻撃を受ける。それをはね返すために、中央と地方の政界に圧力をかけるよう呼びかける発言が続く。拍手を送る聴衆の間をぬって、すらりと背の高い、真黒な制服の警官が、男女一組で巡回している。日本からきた目には異様にうつるが、誰一人気にとめる者はいない。

私は次々になされる発言を聞きながら、それを着英以来見聞きしてきたあれこれと、重ね合わせていた。例えば予算を要求したら、生花教室の費用かと茶化されたという元文部次官の発言は、数日前グレート・ジェームズ通りの事務所に訪ねた、平和運動家のO女史の言葉と重なった。私がイギリスの成人教育を高く評価したのに対して、O女史は、コーラス・グループを作って予算を要求すれば、それで成人教育ということになるのだといって、一笑に付したのである。一方放送大学教授の力強い発言は、私を学外ゼミの熱気の中に連れ戻してくれた。何びとも国民の学ぶ権利を奪うことはできないと前置きした上で、教授は、高校の卒業資格さえ持たない学生が、大学レベルの学習を十分こなすことができるということを、放送大学9年の歴史が示していると言いきった。国民の高い知的水準こそ、戦争を防ぎ平和を守る力であるともいった。私はこの言葉を聞きながら、学外ゼミで出会った人々の姿を思い浮かべていた。どうだ、面白いだろうと私に話しかけてきた、アックスブリッジのサラリーマン。イーストコートの公民館で、私と一緒に重い「ブック・ボックス」を運びながら、講師のコティアさんがすばらしいので、今年のクラスは特に楽しみだと、目を輝かせていた若い主婦。それにヘンドンの図書館まで、毎週車で送り迎えしてくれたSさん夫婦。日本ではこうして夫婦で夜間のクラスに通うことなど、ちょっと考えら

れないことだということ、それでは夫婦の関係が淋しいではありませんか、と奥さんがいった。これらの人々と、放送大学の教授と学生が、成人教育の擁護という点で、生涯学び続ける権利の主張という点で、1つに結びついている。どこかの国の憲法にあるように、国民はその能力に応じて教育を受けるのだという発想は、ここにはない。何びとも、自らの必要に応じて、教育を受ける権利を持つ。これがトラファルガー広場の集会をつらぬく、ヒューマニスティックな思想であった。

およそ2時間にわたる集会を、議長はスローガンの絶叫ではなく、イギリスらしいユーモアで閉じた。『共産党宣言』の言葉（「労働者は鎖以外失うべき何物をも持たない。万国の労働者よ、団結せよ。」）をもじって、議長はこういったのである——Students of the world, unite! You have nothing to lose but your brains.

(後 記)

教育学者ではないので、制度の専門的な分析ではなく、授業現場とそれにかかわる人々の、実感的な再現をめざした。そのため各種の名称など、不正確を承知の上で、簡略化したことがある。

文中引用した書物の原題と、主に利用した資料を次に掲げておく。

Richard Hoggart, *Speaking to Each Other*, II, Penguin, 1973.

R. H. Tawney, *The Radical Tradition*, Penguin, 1966.

Raymond Williams, 'The Teaching Relationship: Both Sides of the Wall', *Education for Democracy*, Penguin, 1970.

do., *The Country and the City*, Chatto, 1973.

Tyrrell Burgess, *A Guide to English Schools*, Penguin, 1964.

John Burrows, *University Adult Education in London: A Century of Achievement*, University of London, 1976.

Michael Locke and John Pratt, *A Guide to Learning after School*, Penguin, 1979.

V. H. H. Green, *The Universities*, Penguin, 1969.

New Horizons, 1972-3; 1979-80; 1980-81, Department of Extra-Mural Studies, University of London.

City Lit, 1980-81, the City Literary Institute.

Matrix, 13, the City Literary Institute, 1979.

Calendar, 1979-80, Birkbeck College, University of London.